

# ランタナの花の咲く頃に

長堂英吉

Nagado Eikichi

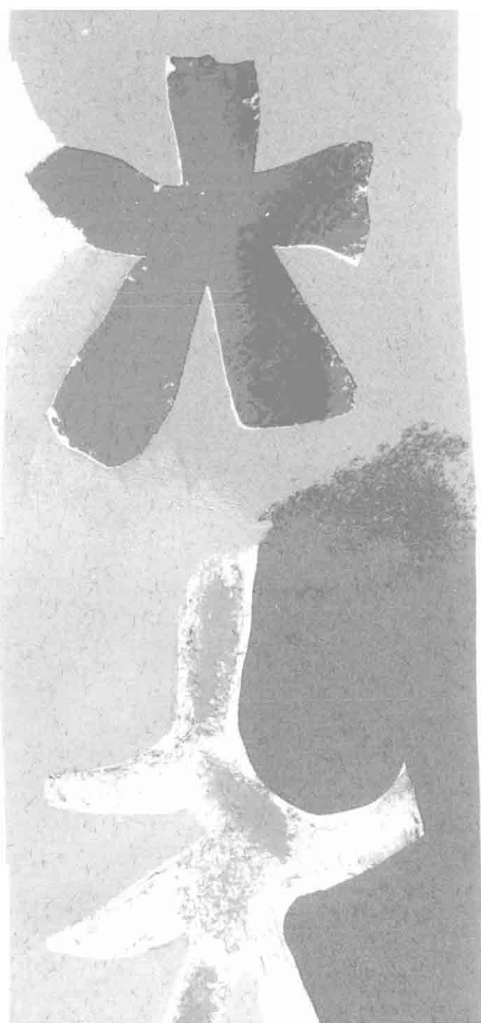


新潮社

長堂英吉

Nagado Eikichi

ランタナの花の咲く頃に



新潮社

ランタナの花の咲く頃に

著者 ● 長堂英吉

© Eikichi Nagado 1991.

Printed in Japan



印刷 一九九一年二月一五日

発行 一九九一年二月二〇日

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一

電話

業務部 (03) 三三六六—五一一  
編集部 (03) 三三六六—五四二

振替 東京四—八〇八

印刷所 錦明印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、二面割ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-379601-4 C0093

価格はカバーに表示してあります。

目次

ランタナの花の咲く頃に……………5

いちじやま……………77

チャンピオン……………139

あとがき……………210

装  
画  
  
松  
本  
孝  
志

ランタナの花の咲く頃に



ランタナの花の咲く頃に





擦り切れたアスファルト道路から狭い路地に入ると、春夫がトタン塀をめぐらしたあき地に立っているのが見えた。いつものように「い」の字形に湾曲した足に泥まみれのゴム長をはき、ワイシャツの裾をズボンの外にだらしく垂らしている。先の開いた袖が中国人の綿入れのように指先まで覆ってひらひらしている。ワイシャツをつけているというより白いメリケン袋から首を突き出しているという感じである。その姿を見ると、なぜか私はいつも凋んだ朝鮮朝顔の花を連想してしまう。

そんなだらしない格好ですこし前こごみになり、空を仰ぐように顎を突き出し、何事かぶつぶつぶやいている。見ているうちにからだを左右に振りながら、ゆっくりと歩きだした。窪んだ目を光らせ、時おり立ち止まり、拳を突き出したり、前方を睨むような格好をしたり、右手で顔を隠すような仕草をしたりしながら夢中になって何事か喋っている。狭いあき地の片側のトタン

塀までゆきつくと回れ右して反対側の塀に向かう。塀と塀の間を歩き来しながら陶酔のなかに浸りきっている。

（またやってやがる）

あき地に近付きながら、私は舌打ちをする。

（あれで嫁を貰おうというんだからな）

私は絶望的な気持ちになる。

春夫はまだ私に気が付かない。ゴム長を引きずりながら、東と西の端を行ったり来たりしている。

「春夫」

十メートルほど手前まで近づいて私は声をかけた。彼は放心の世界に彷徨さまよっている姿を見られるのを嫌うので、突然目の前に現れて嫌な思いをさせまいという配慮が私にある。春夫の足が止まり、こちらに顔を向けた。不意に意識を呼びもどされた面持ちでこちらを見たが、まだ私とは識別できない。

「元氣か」

声をかけて教えてやる。すると泣いた後のようなみずみずしい光を湛えた、そのくせ焦点がどこか拡散した目がじっと眉根を寄せ、私を見つめる。やがて、

「リョウ叔父か」

「ああ」

「……」

何事か口走ったが、言葉にならない。手淫を見つかって狼狽うろたえている子供の声に似ている。

「かあさん、うちか」

「ああ、いたよ」

色艶の悪い唇から虫歯だらけの前歯ぜのぞいている。

「そんなふうにはフラフラ歩き回っていると、キチガイと間違えられるぞ」

無駄を承知で私はいう。

「わかつている」

春夫は目の周りを赤らめ、怒ったように顔を左右に振った。

「そのワイシャツは何とかならんのだ。もっとちゃんとした格好は出来んの」

「わかつているよ」

いちいちうるさいことを言うな、というように不自由な左肩をひとゆすりすると、背を向けて歩きかけたが、

「リョウ叔父」

と、立ち止まった。私はそのままゆっくりと歩き続ける。

「オレな、散髪屋をやろうと思っているんだ」

立ち去って行く私を逃がすまいとするように声が追っかけてきた。あき地を行ったり来たりし

ながらずっとそのことを考え続けていたらしく、声が火照っていた。これまで貯金してきた障害福祉年金で床屋をやるというのは彼が描いてきた夢である。それは彼が考えた女を捉えるための仕掛けである。クモが巢をかけるように網を張って女を待ち構え、かかったら素早く捉えて妻にする。ここ四、五年彼はそのことばかりに思いをめぐらしている。その話を私は前回来たときも前々回来たときも聞かされている。

「その話ならもう終わったと思ったけど……。おまえもよく粘るねえ」

私は背中にかぶさってくる声を払いのける。

「おれは、やめろといったはずだよ」

「いや、ぼくは諦めないよ、本当にやろうと思っているんだから」

振り返ると小さなよく光る目で斜<sup>ハジ</sup>かに空を睨み、無精髭ののびた細い顎をふりたてている。私は立ち止まった。

「おまえ、福祉事務所に行ったんだってな」

「ああ、行ったよ」

「何と言ってた」

「考えておくと言ってたよ」

「それだけじゃないだろ」

「……」

「おれとよく相談しろといわなかったか」

「……」

「リョウ叔父と相談しろといったはずだぜ」

「ああ、それも言つてた」

「じゃ、なぜよく相談してから行かない」

「相談したら反対されるに決まってるじゃないか」

わかりきったことを、といったげに拗ねた笑いを浮かべた。

ここ何年も彼は質屋をやるといつてみたり、レストランを経営するといつてみたり、自分の能力とおよそかけ離れた仕事をやるんだといつては母親を困らせ、親戚の者たちの失笑を買つてきた。道をほつつき歩きながら、あるいは一日じゅう部屋の片隅にすわりこんであれやこれやと空想に耽り、ついには現実の垣をひとまたぎして誰彼の見境もなく相談を持ちかけては失笑を買つてしまうのだ。その計画は彼の知力体力からみて、所詮夢でしかなく、だから姉も私もそのつど適当にあしらつてきた。

それが昨年あたりからそんな呑気なことではすまされなくなつてきたのだ。彼の空想は預金の高が増えてくるにつれてますます広がりを見せ、話の持ち出しも執拗になつてきた。そして近頃では親が本氣になつて取り合つてくれないと思つたのか福祉事務所にまで足を運ぶようになったのだ。そのことを係員から電話で知らされて私は不意打ちを喰らつたように慌てた。

「散髪屋をやるといったつておまえ、誰が髪を刈るのかね。まさかおまえが手探りで刈るというわけにもいかんだろう。だいたいあれをやるには免許がいるし、保健所の許可だつているんだよ、

おまえは理髪師の免許を持ってないだろうが……」

私は先日、先々日と口にしたことが出来るくらい繰り返した言葉をうんざりしながらまた繰り返す。左半身はいうことをきかず、目も薄ボンヤリとしか見えないおまえにどうやって人の髪が刈れるんだよ、散髪屋が聞いたら怒り出すぜ、ほんとに。

「免許なんかなくなつてやろうと思えばやれる方法があるんだ。このあいだも言ったじゃないか」

「人を雇おうというんだろう」

「そうだ」

「女の職人だろ」

「……」

「そしてその女と結婚しようというんだろう。……その話はもう聞き飽きたね」

私ははつきりいつてやる。

「駄目かな」

「だめだね」

「だって店の設備やらなにやら一切ただあげるんだぜ」

「設備と一緒におまえ自身も引きとつてもらおうというんだろうが、そんな見え透いたワナに引かかる女がいるもんかね、いまどき。馬鹿な考えはやめたほうがいいよ」

私は厳しい口調になつていう。

「なにが馬鹿な考えだ」

春夫は白い目を陽に吊り上げて喰ってかかる。

「やってみんことにはわからんじゃないか」

「やってみてからでは遅いんだよ。設備を作って女が現れなかったらどうする？ たとい女の職人が来たにしてもおまえと一緒にするのは嫌だといったらどうする？ いいかね、いくら溜めこんでいるか知らないが、その金をそんなことで撒き散らしてしまつたらもうおまえはおしまいだよ。もうすこし地道なことを考えろよ。もう少し金のかからない、金を無駄に捨てなくてもすむような、例えば養鶏とか養豚とか、そういう仕事をやってみる気にはなれんのかね」

「豚を飼って女が来るもんか」

春夫がせせら笑った。

「その金を吹つとばしてしまつたら、もうおまえはおしまいだよ。これからさき、おまえはそのお金に頼って生きていくしかないんだからね」

私は果てしのない議論の蒸し返しに打ち切りを宣告する。無慈悲なようだが、私に妥協の余地はない。

春夫の目が急に赤らみ、涙が膨れあがる。横を向いて泣き始める。私は胸のふさがる思いがする。四十五にもなろうという男がまるで子供のように嘔<sup>すく</sup>り泣いている。妻が欲しいといって。

滑車の滑り過ぎる玄関の引き戸をあけると姉とマカト婆さんが茶の間にすわってこちらを見て



いた。

「話が筒抜けだよ」

姉が笑った。

マカト婆さんに挨拶して私は座布団を尻にあてがった。マカト婆さんは亡くなった私達の祖母の妹である。

「相変らずだね」

「そうなの、ずっとあの調子なんだよ」

姉は唇を歪めた。

「仲坊の子供が高校にあがったと聞かされてからはもう毎日あんな調子で大変なのよ。焦りが出てきたのね」

「……そうねえ、いとこというところがみんな結婚し、子供が出来、高校に通う頃ともなると、もう居たたまれないんだろねえ、可哀そうに」マカト婆さんが湯呑を口に運びながらいった。

姉が台所に立つと、マカト婆さんは声をひそめて、

「それだけならまだいいけど、近頃では夜遅くなつてから、用もないのに近所の若い娘さんのいる家の玄関の前に突っ立っていたりするというんで、娘さんを持つ家から苦情を持ち込まれたりしてね」

「困ったな」

「それも一軒や二軒じゃなく、このあいだはあれが交番に呼ばれてえらく叱られてね」